

# フランスにおける大学入学資格試験制度の近代化過程

—— フォルトゥール文相の改革を中心として ——

宮 脇 陽 三

## 内 容 目 次

- 一 フォルトゥール文相の改革の背景
- 二 フォルトゥール文相の改革の目的
- 三 試験方法
- 四 フォルトゥール文相の改革の結果
- 五 フォルトゥール文相の改革の影響  
—— ルーラン文相の改革の場合 ——

## 一 フォルトゥル文相の改革の背景

専科（近代教科中心）中等教育を編成しようとする試みは、一八〇二年における中央学校ユゴーヤセントラルの廃止措置によつて、完全に根絶されたわけではない。一八二九年には、王立中等学校ロイヤル・エコール・ミッドルの中に現代外国語と工業応用科学を教授する専科課程の新設が認可されたのである。

七月王政政府時代にも、現代外国語や科学によつて眞の教養を育成したいという構想がしばしば表明された。このように第十九世紀の前半期においては、中等学校教育課程の中に近代教科を導入することが、三十年以上にもわたつて要望され続けたのである。経済学者ブランキは中等学校教育界と生産企業界との間に、大きな隔差が生じていると指摘した。サン・シモン主義者シュバリエは、ギリシア・ラテン古典語偏重教育は国家経済の発展にきわめて不利であると主張している。自然科学者たちも、中等学校教育課程が当代における科学の発達を無視し、科学上の重要な発見が教材の中に採り入れられていないと、たえず警告を発していた。

一八四七年に科学者代表デュマは、パリ大学理学部の名で、中等学校における科学教育が憂慮すべき状態にあることを指摘したが、その報告書の要旨（II, 83）はつぎの通りである。

科学は中等学校の第六および第五学級ではなんらの地位も与えられていない。第三学級から修辭学級までにおいては、科学は随意科目の地位しか占めていない。

哲学級生徒は科学科目の過重負担に押しつぶされそうになっている。そのうえ哲学級生徒は大学入学資格試験にふり廻されている。かれらは催眠術にかけられたかのように、大学入学資格試験よりほかのことは、何も考えてい

ない。かれらは、ただ断片的な言葉やばらばらの觀念、試験めあての公式の丸暗記だけにうき身をやつしている。専門大学校の入試科目である科学の受験準備教育は、リセ・ニアンジュ国公立中等学校よりも、むしろ、いくつかの私塾で活発に行なわれているのである。

ところで、ブランキ、シュバリエ、デュマ以前にも、少数の有識者は、社会問題と教育問題は密接不離な関係にあるから、工業界、農業界、商業界に有能な人物を供給するためには、初等教育よりも高度な実学中心の中等教育、つまりギリシア・ラテン語古典教養偏重の中等教育とは別個の、ギリシア・ラテン語古典を使用しない中等教育が必要であることを洞察していた。

当代のフランス社会では、産業革命による機械の使用と、目ざましい科学の躍進の時代が始まっていた。旧来の科学はたえず発展しつつ、新興科学も誕生しつつあった。国際関係は増大し、現代外国語は実生活にますます必要となってきたのである。

工業界、商業界は、たえず多数の技術者を要求した。職業的関心が万事に優先した。資本主義経済の競争は、個人がつねに実生活に対して武装することを要求した。科学教養は社会と個人にとって、望ましい財産となったのである。社会の広範囲な階層の人びとの、「公共的事柄への参加」(6.11)は、ますます教育を必要とするようになったのである。

このような社会の要請に応じるために、いくつかの中等学校の校長は、科学と現代外国語を中心とした専科課程を設置した。すでに、革命暦十二年(一八〇三年)には、コレージュ・ド・サン・バルブ校は商業科を設置して、多数の生徒を吸収していた。このような先導的試行は、王政復古政府時代の地方小都市で著しく増大していた。

「地方小都市における公立商業中等<sup>コレージュ</sup>学校長は、自校生徒の保護者である労働者階級の要求に応じるように配慮した」(13, 109) からである。

パリの言論界は、このような実学主義教育運動に対して大きな関心を寄せていた。一八三三年に「世界新聞」<sup>タフゼット・ユニヴァーセル</sup>は、小学校教育と中等<sup>コレージュ</sup>学校教育の断層を埋める最良の方法について懸賞論文を募集し、ルヌアルが入賞した。

ルヌアルの見解の要旨は、つぎの通りである。「古典語教育は少数のフランス人には、すぐれた価値をもっていると考えられる。しかし大衆の子弟にとつては、それは有害ではないとしても、無用の長物であると考えられる。それゆえ古典語教育を廃止するのではなくて、国語、道徳(宗教と法規を含む)、歴史、地理、自然科学、力学、算数、幾何学、製図、体操を含んだ新しい中等学校教育課程を設ければよいのである。」(13, 109) つまり、中等学校教育課程を古典語教育と実学主義教育の二本立てで平行して編成すればよいというわけである。これはフランス教育制度が、現実の社会階級のそれぞれに対応しているために、新興中産市民階級の要請に対応した中等教育系統の新設を提案したものであると考えてよいであろう。

バチメニル文相の一八二三年における最初の仕事は、これまでの中等学校教育課程の中へ、科学の発達の成果と、現代外国語(英語、ドイツ語など)を導入することによって、これまでのギリシア・ラテン語古典偏重の中等教育の近代化を図ることにあつた。しかしバチメニル文相による近代化路線に対して、一八三〇年の七月王政政府は、科学の地位が不利になるにもかかわらず、ギリシア・ラテン語古典科目の強化の方向へふみ切つたのである。

一八二四年における「世界新聞」懸賞論文審査委員であつたギゾは、一八三二年に自分の子供フランソワの教育に関する手紙を、友人宛に書いている。「フランソワは哲学と数学を学びたいと考えています。それは新世界であ

り、旧弊な人びとが嫌った学科です。フランソワが最近数カ年間、ギリシア語、ラテン語学習に退屈しないようにするためには、わたくしに対する多大の親密感と信頼感が必要でした。」(II, 84)

つまりギゾ文相は、古典語学習には多大の改善すべき問題があることを痛感していたのである。中等学校教育は実社会の要求にあまり適応しておらず、遅れていたのである。当代の中等学校の雰囲気は、実社会の知的雰囲気から離れているどころではなく、隔絶していたといつてよいのである。しかし、ギゾ文相はギリシア・ラテン語古典教育の効果を、かなり大きく信頼していた。かれは、もしギリシア・ラテン語古典教養を身につけているのであれば、ただの成り上り者の知識人であるにすぎないとさえ考えていたのである。

ギゾ文相は、教育問題でもあれば社会問題でもある国公立中等学校における文学教養と科学教養の同盟という厄介な問題を、ひとまず棚上げして、その決定的な解決を延期したのである。その代りに、かれは、一八三三年六月二八日の法律によって、高等小学校を設置したのである。

ギゾ文相は、一八三七年三月に議会へ中等教育法案を提出した。ビクトール・ド・トラシ議員は、中等学校教育課程ならびに、その必然的結果である大学入学資格試験の試験科目について、活発な意見を展開した。かれの父は革命期の中央学校教育課程編成者であった。トラシ議員はその父親と同じように、中等学校における文学偏重教育の維持を非難した。

中等教育法案の審議は数日間続いた。アラゴ議員とラマルチエヌ議員の論争が起った。アラゴの見解(II, 85)は、つぎの通りである。

中等学校において、すぐれた文学教育は必要である。文学教育を受けない中等学校卒業者は、だれであっても、

不完全で未完成の人間でしかありえない。ところで文学教育の効果をあげるためには、無理にギリシア語やラテン語だけに任せる必要もないのである。ギリシア語、ラテン語は王立中等学校に一任しておけばよい。その他の公立中等学校では、それぞれの地域社会の必要に応じて選択された現代外国語教育に代えた方がよいのである。

ラマルチーヌ議員は、実業教育（工業教育または商業教育）を充実し発展させるとともに、最大の成果をあげるためには、国民全体の、共通の思想の土台となるべき文学教育の上に、これらの実業教育を振興するべきであると主張した。

かれの見解 (II, 86) は、つぎの通りである。ギリシア語、ラテン語学習のみが、国民を共通の思想へ指導することができるのである。なぜなら古代のギリシア人やローマ人だけが、美的感覚をもっていたからなのである。

しかし、この二人の議員の論争は、結局いずれにも決着がつけられないまままで打ち切られることになったのである。

ギゾ文相は、中等学校教育課程および大学入学資格試験の試験科目におけるギリシア語、ラテン語の優位に対して、あえて手を触れようとはしなかった。

ビルメン文相とクーザン文相は、いずれも中等学校教育課程におけるギリシア語、ラテン語の優位と特権を維持した。

かくして科学（理科）教育は、中等学校では第六学級から修辞学級までの全部の学級から締め出され、ただ哲学級にだけ、たびたび押し込められるはめになったのである。

共和主義者バスタアは、ラテン語教師が、つねに生徒にひけらかした侵略者ローマ人に対する礼讃を痛烈に批判

しながら、王立中等学校生徒に社会主義思想を指導した。バスチアはギリシア語とラテン語の教養は無用であると非難するだけにとどまらず、さらにローマ人著作家の道徳的品性に対してすらも非難したのである。かれの見解の要旨 (11, 87) は、つぎの通りである。

世界のどこに労働を嫌い、軽蔑して、自己の生存のあらゆる手段を、近隣のすべての人から収奪しつづけているような国民、つまり、自己の生活の土台を、奴隷制度に置いているような国民がいるだろうか。この国民は、自己保存と自己発展のために、残酷な原理に対応した政治、道徳、宗教、世論をつくりあげたのである。

聖職者が教育独占権をもったフランスでは、聖職者はフランスのすべての青少年を、自由自在に、そのような国民のもとへ派遣していた。フランスの青少年は、そのような国民の生活を体験し、その感情を感じ得し、その情熱に燃え上り、その思想を身につけてくるだけである。聖職者の仕事は、生徒が聖書を身につけて、そのような国民のもとへ出かけるように注意することだけではない。

このようにして教育された青少年が、祖国フランスへふたたび帰ってくる。革命が勃発する。かれらが、その時にどのような行動を演ずるかは、ここでは考えないことにする。それを見た国家は、聖職者から教育独占権を取り上げ、それを国公立大学<sup>ユニベルシテ</sup>学校教育団体へ委託する。伝統に忠実な国公立学校教育団体も、また青少年を彼地の略奪者でもあり、奴隷所有者である人びとのもとへ、『哲学』という題の書物を持たせて、送りこむのである。

このようにして教育された五世代または六世代の青少年が、第二次革命爆発寸前の祖国フランスへ辛うじて帰ってくる。先輩と同じローマ人学校で教育を受けたかれらは、先輩の堂々たる好敵手として姿を現わす。

かくして教育独占者間に戦争が起る。聖職者は、あらゆる悪の根源は汝らの小さな『哲学』書であるという。国

公立学校教育団体もまた、それは汝らの『聖書』であるという。ところで、はたしてそうであろうか。諸君ノそうではないのだ。ちっぽけな聖書や哲学書は、全く何もしなかったのである。真犯人は、労働、平和、自由を目指すベキフランスの青少年に、強盗であり、奴隷を酷使した人びとの思想と感情をしみこませ、いやというほど吹き込んで、諸君に悪事を考えさせ、実行させた奇妙な観念自体なのである。

ド・ラブラドにとって、バスターアのようなラテン語古典文化反对論者は、「唯物論者、無神論者、革命家、社会主義者」(2, 176) よりほかの何ものでもなかった。つまりラテン語古典教養の後退は、とりもなおさずキリスト教信仰の土台をゆさぶる結果になると考えられたのである。

人間精神の活動が、もっとも高貴な形態で表現されている文学と、物質界の法則を決定し記録する科学の間には、精神界と物質界、また神聖な事柄と世俗的な事柄を区別するのと同じくらいの隔差が存在している。

ここからキリスト教徒や、人間性の中に人間的なもの、万物の霊長である人間に独自なものを認めている人びとにとって、たんに物質界を対象とした科学だけを教授する学校で児童生徒を教育するのは、かれらを物質化し、その神聖な本性を汚し、その真の人間性の本質の発達を妨げるものであるという意識が生じたのである。

したがって、文学教養か科学教養かという二者択一を迫る教育問題が起って来た時には、文学教養は、かつてキリスト教の教義に対する不信感を注入したりしたにもかかわらず、科学教養に対する保守派の人びとの根強い反感から、有利に拡大解釈されて、真に人間らしい精神を育成することができる、唯一つの教育であると見なされるようになったのである。

このような教育思潮に対して、サン・シモン主義者フォルトゥル文相は、ギリシア・ラテン語古典教育の効果に



ついで論争することよりも、むしろ一国の経済活動と物質的繁栄を促進することの方が、もっと重要な問題であると考えたのである。

一七八九年の大革命以後から一八三〇年頃までのフランスでは、工場主、商人の子弟は、小学校系統の学校にしか進学しなかった。<sup>リセ・コレージュ・ロワイヤル</sup>国立中等学校から大学など高等教育機関への進学は、医師や弁護士、官吏などの子弟に限られていたのである。

ギゾ文相が一八三三年に設置した高等小学校は、工場主、商人階級と労働者階級の子弟を混成して教育することになったから、小有産市民階級の人々は、高等小学校に対してあまり好意をもたなかった。そのうえ、多数の地方自治体は財源難から既存の公立中等学校の中へ、高等小学校を併設した。しかし旧来の古典課程中等教育と小学校教育との「中間教育」<sup>アンセーニユ・ファンテルメディール</sup> (13, 113) は、公立中等学校の中に併設された場合には、家庭の虚栄心のために、うまく運営できなかつたのである。小有産市民階級の家庭は、子弟をそのような学校には送ろうとはしない。なぜなら、それらの学校はもともと下層の労働者階級の子弟をめあてとして設置されていたのであるが、大衆民主主義社会では、「革命期を除けば、だれだって、ずっと大衆でありたいとは望んでいなかった」 (13, 114) からである。

サン・マルク・ジラルダン<sup>サン・マルク・ジラルダン</sup>は、このような中間教育として、ラテン語と国語のいずれかを選択履修できる科学中心の近代課程中等教育を設置した。かれは、一八四七年に「フランス社会の統一は国公立学校教育団体の根本的存在理由である。国公立学校教育団体はフランス社会が一つであるから、一つでなければならぬ。そして国公立学校教育団体は現在の社会の仕事が本質的に多様であるから、その教育においても多様でなければならぬのである」 (2, 177) と述べている。

サルバンディ文相も、サン・マルク・ジラルダンと同じ構想の下に、近代科課程中等教育を編成しようとした。

かれの教育課程編成の原理は、生徒の学習の自由、つまり選択履修制と、学習の多様化であった。一八四七年三月五日の法令は、すべての王立および公立中等学校の第四学級以上で、古典課程教育に並行する形で、科学などの近代科目を中心とした専科教育を設置した。

その教育課程は、「科学と現代外国語のほかに、会計、商法および農業経済の初歩」(8, 85)を含んでいた。しかし、この法令の施行は、一八四八年の革命によつて延期された。それゆえ、クーザン文相が制定した中等学校教育課程は、実際には一八四九年のパリュウ文相による、わずかな変更を除くと、まったく変更されなかったのである。

有産市民階級支配時代に、一方が他方より劣等といわれている二つの教育を、同一の中等学校コレージュの中に並置することは、とりもなおさず古い古典課程教育を強化し、新しい近代課程教育を体裁の悪いものにする。

それゆえ、ギゾ文相以後の各文相は共通の誤まりを犯したのである。かれらはいずれも、一国の社会と政治の状況が、つねに教育制度にも反映していることをみすごしたからである。とりわけ十九世紀以降のフランスの「教育制度は、つねにフランス社会の変化の場所であり、手段であった」(12, 12)のである。

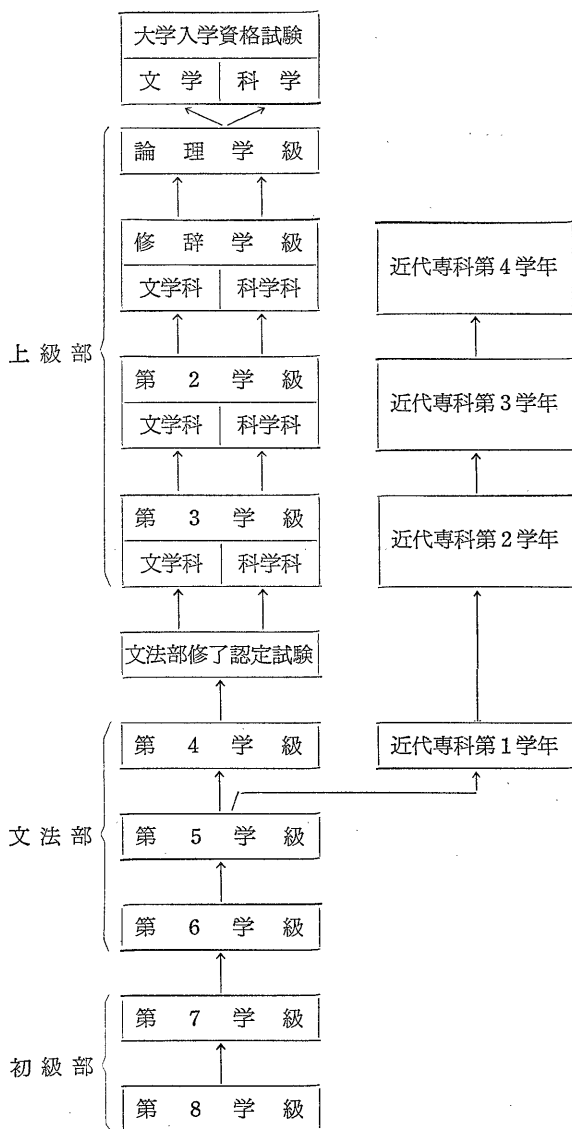
例えば、コレージュ・ド・サン・バルブ校商業科生徒は、「ラテン語ぬきのかす」(13, 115)ときげすまれたのである。それゆえ、同校商業科長が上品な奥様に向つて、その令息を商業科へ進学させるように勧告した時、その奥様はとんでもないという顔つきで、「科長さん、この世のなにものに代えても、わたくしは、自分の息子が阿呆だなんて思われたくありませんわ」(13, 115)と返答したのである。

思うに、ラテン語教育に対する世間一般からの絶大なる信頼は、ラテン語を含まないような近代教科中心の中等教育が、まだ世人を納得させるだけの十分な信用と魅力をもつようにはなっていないかったことによるのである。

## 二 フォルトゥル文相の改革の目的

一八五一年から一八五六年までの第二帝国政府時代前期における権威主義的な教育行政を担当したフォルトゥル

〔第1図〕 第二帝国政府時代におけるフランス国公立中等学校の教育系統一覧



〔第1表〕 国公立中等学校教育課程（1852年4月10日布令）

部 門	履修期間 (年)	学 級	古 典 課 程 ・ 教 科 履 修 方 法				専 科 課 程
			共 通	分 岐			
				文 学 科	科 学 科		
上 級 部	4	論理学	論 理 学 ラテン語 国語 現代外国語 歴 史	ラテン語 ギリシア語 論 理 学 幾 何 学 物 理 学 化 学 博 物 学	算 代 幾 代 数 幾 何 物 理 物 角 三 力 学 ・ 製 図	術 学 数 学 幾 何 物 理 物 角 法 学 農 業 經 済	科 学 現 代 外 国 語 会 計 法 学 農 業 經 済
		修辞学					
		第 2					
		第 3					
文 法 部	3	第 4	国語 ギリシア語 ラテン語 文 学 歴 史 地 算 理 術				
		第 5					
		第 6					
初 級 部	2	第 7					
		第 8					

- 備 考
1. 各部修了時に学力検査を実施して、進級の可否を決定する。
  2. 専科課程の教育課程は1847～1848年の場合である。専科課程は1829年から1941年まで設置されていた。
  3. 初級部は小学校程度の中等学校予科部門である。

文相は、文学教育と科学教育についての、前述のような世人の誤解を是正するために、同等の価値と權威をもった文学と科学の二種類の教育系統に生徒を配分し、また文学大  
学入学資格試験と科学大学入学資格試験を同格のものにしようとしたのである。かれは一八五二年四月一〇日の布令および同年八月三〇日の政令によって、新中等学校教育課程を公布した。この新制度はまもなく、文理科履修分岐制度と呼ばれるようになった。すべての中等学校生徒は、第1図と第1表に示す通り、

「共通幹」(5, 289) の第六、第五、第四学級までは共通に履修するのである。「第四学級の修了時に、生徒は文学科(文科)か科学科(理科)のいずれかを選択しなければならなかった。」(3, 115) この文法部修了認定試験の成績は、上級の文科および理科の学級への進級に必要な特別免状によって認定される。第三学級以後では、生徒は文科と理科に分離し、完成学年の論理学級でふたたびひとつにまとめられるのである。これは、これまで自然発生的に行なわれてきた文理科履修分岐を、合理的に配慮された文理科履修分岐に制度化することによって、これまでの無秩序の代りに、秩序を与えようとしたのである。

上級部の授業時間の大部分は、現代外国語に配当された。上級部教育のねらいは、学習の多様化とともに統一性の確保である。その統一の中心は、ラテン語を中心とした国語、国史など文学教養の共通履修科目であった。したがって文理科履修分岐制度といっても、絶対的なものではなく、文科も理科も、一週につき二時間ずつ一〇こまの授業のうち、五こまの授業は文学を履修することになっていたのである。

なお完成学年が、これまでの哲学級という名称から論理学級という名称に改定された理由は、「哲学」から青少年の精神、道徳ならびに神の裁きに関する最も高貴にして多産的な部分を削除して、たんに「理性の体操」(13, 138) だけに圧縮することになったといつてよいであろう。

フォルトゥル文相は、大学入学資格試験も文学大学入学資格試験と科学大学入学資格試験にそれぞれ独立させ、二本立てとした。したがって科学大学入学資格試験の受験者は、一八五二年以後は文学大学入学資格学位免状の提出義務を免除されたのである。かくして、科学大学入学資格学位免状は、約半世紀かかって、ようやく文学大学入学資格学位免状と同等の特権をもつことになったのである。

### 三 試験 方 法

科学大学入学資格試験は、第2表に示す通り、筆記試験と口述試験である。受験者は、いずれかの科目の評点が

〔第2表〕 科学大学入学資格試験（1852年9月7日規則）

種 別	部 門	試 験 科 目	試 験 時 間	備 考
筆記試験	文 学 科 学	ラテン語仏訳 数 学または 物 理 学	2 時 間 4 時 間	出題はくじ 引きによる
口 述 試 験	解 釈	ラテン語 国 語 英 語または ドイツ語	1時間15分	
		論 理 学 歴 史 地 理		
	試 問	数 学 {算 術 幾 何 代 数 三 角 法 画 法幾何 測 量 図 水準測量 物 理 学 博 物 学		

不可である場合には落第となった。口述試験における文学部門と科学部門は同等である。試験事務官は、抽籤箱の中に入っている文学系科目の登録済み著書の該当番号の中から、受験者が下調べをしないで、すぐに解釈するラテン語、国語、ドイツ語、英語の指定著書の各番号を引いた。

科学の各科目に関する口述試験は、旧科学大学入学資格試験の試験科目と同じである。また旧物理学大学入学資格試験の試験科目も試問された。ただし、旧科学大学入学資格試験と旧物理学大学入学資格試験の試験科目内容に含まれていた

数学、物理学、化学、博物学の高度な部分は、数理学士、物理学士、博物学士の三種類の学士号試験へ移行された。

〔第3表〕 文学大学入学資格試験（1852年9月5日規則）

種 別	部 門	試 験 科 目	試 験 時 間	備 考
筆記試験	文 学	ラテン語 仏 訳	2 時 間	
		ラテン語 作 文 また は 文 国 語 作 文	4 時 間	
口 述 試 験	解 釈	ギリシア 語 ラテン語 学 国 論 理 史 歴	1 時 間	
	試 問	科 学 算 幾 何 物 理 学 学		

一八五二年の科学大学入学資格試験に関する規則は、旧文学大学入学資格試験におけるギリシア語を英語またはドイツ語に代えたこと、古代史と中世史を削除したことなどからみると、それまでの文学、数学、物理学という三種類の大学入学資格試験に分離していたものを、科学大学入学資格試験としてひとまとめに整理したと考えられるのである。

文学大学入学資格試験は、一八五二年九月五日の規則によって、第3表に示す通り、筆記試験と口述試験の二本立てとなった。口述試験は、科学大学入学資格試験との均衡のためから、文学部門と科学部門とに区分された。筆記試験は、一八四〇年七月一四日の規則が制定したラテン語翻訳以外に、くじ引きで出題されるラテン語作文または国語作文によって強化された。

文学大学入学資格試験の筆記試験の強化は、かなり以前から要望されていた。この点について、フォルトゥル文相から大学区総長宛の通達の手紙は、つぎの通りである。

これまでの経験によって、ラテン語翻訳は試験の基本的条件ま

たは土台となり得ないことが証明された。したがって、受験者はラテン語翻訳のほかにラテン語作文または国語作文の補充によって、自己の能力を発揮し、またラテン語翻訳の不十分さを補充できるようになるだろう。試験官もまた、この措置によって受験者の実力を十分に認識できるようになるだろう。

口述試験では、現代外国語が姿を消し、科学と哲学の学習内容の分量も削減された。科学部門は算術、平面幾何学および物理学だけとなった。哲学も中世的な三段論法の論理学に縮少された。その出題範囲も、政治からは中立のあたりさわりのない問題に限定された。文学部門の国史科目では、地方史が姿を消しルイ十四世時代史は優遇されたが、しかし部分的には削除された。たとえば、教会関係の事柄、とりわけフランス教会派教会の自由、ルイ十四世時代のカルビニズム（新教）、ナント勅令の廃止、ヤンセン派教徒、イエス社教団修道士の中国伝道などは削除された。ガリレーおよびパスカルに関する部分は全部姿を消した。

フォルトゥル文相は、文学および科学の大学入学資格試験の改革に着手すると同時に、一八五二年四月一〇日に国立中等学校教育課程も改定した。この場合、フォルトゥル文相は、たんに教育界の要望だけによって、ミシュレの「近代史綱要」を禁書にしたり、文学科目と哲学科目の内容について、大鉈を振って削除したわけではない。かれは、あまりにも野心的な教育に対する憂慮、落第の心配、博覧強記や重箱の隅をほじくるような探究癖、また煩瑣な議論好きなどから、教師と生徒を守ろうとしたのである。かれは、老人特有の頑固一徹の情熱によって、大学入学資格試験のすべての試験科目を削減しようとしたのである。

しかし、かれは大学入学資格試験の改革にあたって、一八四〇年のクーザン文相の教育制度批判、また一八二〇年以来、新聞や出版物、また議政壇上をにぎわした論戦などによって蓄積された経験を、十分に尊重したのである。



一八五二年四月一〇日の布令は、国立中等学校教育課程を制定した。この布令の趣旨は、つぎの通りである。これまでの文学大学入学資格試験と科学大学入学資格試験は、実際には中等学校の文学教育や科学教育となんらの関係もたないようになってしまっている。その結果、中等学校教育は、中等教育の必然的な補足である高等教育とは、きわめて不十分にしか結びつかなくなってしまった。

実際、文学大学入学資格試験は一種の丸暗記術にふりまわされるようになり、もはや中等学校文学教育を的確に反映しなくなってしまうたのである。文学大学入学資格免状取得者であっても、真の文学価値をほとんど保証していない免状しか取得していないような有様である。

さらに、大学の理学部、医学部、薬学部に進学する学生は、文学大学入学資格免状をまったく必要ともしないし、そのほか文学関係の職業にまったく関係しない学生であっても、これまでは文学大学入学資格免状を取得しなければならなかったのである。

かくして、文学大学入学資格試験は、まったく実効のない形式的な試験になってしまった。それは文学能力の認定ではなくなり、真の古典教育に甚大な損失をもたらしたのである。文学大学入学資格試験が知的教養の公正な証明となり、またその必要不可欠な条件となるのは、ただ文学部、法学部、神学部の教育へ、真剣に準備する場合だけである。その場合にだけ、文学大学入学資格試験は丸暗記作業や、一夜づけの準備ではなくて、十分な時間をかけて系統的に身につけた知識を検証できるようにするのである。

フォルトゥル文相によれば、文学大学入学資格試験は中等学校の適正にして妥当なギリシア・ラテン語古典教育水準よりも低いのに反して、科学大学入学資格試験は中等学校の適正にして妥当な教育水準をはるかに越えてしま

つていたのである。そのうえ、科学大学入学資格試験と物理学・博物学大学入学資格試験の二種類に分れているのは正しくないのである。科学大学入学資格学位は、もともと「理科関係学部の入学資格」(11, 32)である。それは数学、物理学、博物学、医学、薬学の一般的履修能力の検定試験でしかなかったはずである。それなのに理科系統の専門知識にあまり深入りすることは、この学位に不当な要求をすることになるのではないかと考えられたのである。将来の専門職業の選択は、科学大学入学資格学位を取得した後に行なえばよいのである。学生は、(一)理学部関係の学士号、(二)薬剤師免状、(三)学位を所持しない開業医師免状を取得するようになる時期に、それぞれの専門領域別に分化すればよいというのである。

このような観点から、科学大学入学資格試験が中等学校程度の文学教育修了認定であるのと同じように、中等学校程度の科学教育の認定措置としては、科学大学入学資格試験の一種類だけでよいと決定されたのである。

この文学と科学の二種類の大学入学資格試験は、同じ性格の試験制度であったが、相互に無関係であった。なぜなら、文学と科学の両方の才能に恵まれたごく少数の秀才を除くと、大多数の普通の才能の学生に対して、文学と文学の両方の履修を同時に義務づけるのは、「二兎を追う者は一兎も得ず」の結果になってしまうからである。

サルバンディ文相とクーザン文相は、生徒を文科と理科に区分せずに、数学と物理学の履修を、生徒の抽象的思考力の発達時期まで保留した。それらの教科は、完成学年の哲学級になって、ようやく履修されるだけであった。

フォルトゥル文相は、天賦才能教育観に基づいて、理科教育と文科教育の履修分岐を実施したのである。かれによれば、普通程度の能力で合格できないような事柄は、いかなる科目または内容であっても、大学入学資格試験とは縁を切らなければならなかったのである。「正規の中等学校教育課程履修者、教養人であれば、誰もが必ず知っ

ておかねばならない古典文学、歴史、地理、科学の基礎觀念に關する知識を身につけた受験者は、誰であつても大学入学資格免狀を取得できる」(11, 93) ことになったのである。

さらに、かれは試験科目を減らすことによつて生徒が學業に多くの力を注ぎこみ、大学入学資格試験に對して、大きな価値を与えることができると確信していた。

この点についてのフォルトゥル文相の見解(11, 93)は、つぎの通りである。

これまでの経験が示すごとく、旧大学入学資格試験法規は、不自然な受験準備および知性よりも記憶力に有利なようになつていた。しかし、われわれは自由専門職業の発達のために、まやかしの試験制度を急いで改正しなければならぬ。

大学入学資格試験の表面的な幻想だけの価値でなく、正当な価値を認めるためにも、われわれは、中等学校教育水準を向上させるような大学入学資格試験制度を即時実施しなければならないのである。たとえば、大学入学資格試験の試験科目が制限されたとしても、それは試験を厳正なものにする条件である。また、生徒が法規所定の學業に一層多くの熱意に燃えて、効果的に専念できるようにするためである。試験官は、生徒の文學學習に無關係な科學學習の負担を軽減したわけではないということを銘記すべきである。

フォルトゥル文相は、試験方法については、公教育高等評議會とともに大学入学資格試験の受験資格年令を一八才以上と規定した。かれによれば、「一六才であれば、生徒は、大學学部への門戸を開く大学入学資格學位の要求する學力條件を満足させることはできないと、広く認められている。現在、受験者に認められている年令條件の特別は、大学入学資格試験制度の將來を危うくする。なぜなら、自由職業に従事する場合、速成免狀は、多大の時間

をかけなければ身につかない熟練の代理をすることはできないからである」(11, 93)。

公教育高等評議会は、大学入学資格試験の受験者が一八才未満であれば受験できないと決定した。政府は公教育高等評議令の勧告にしたがって、大学入学資格試験の受験資格年令制限を採択した。この措置は議会の承認なしには成立しない。しかるに、議会は大学入学資格試験の受験年令資格制限法案審議委員会の報告者ラングロアの勧告にもかかわらず、否決してしまったのである。

さらに、フォルトゥル文相は、(一)少なくとも論文問題コンポジションの試験時間中だけでも、受験者が受験順位を変更するのをできないようにすること。(二)替玉受験のような不正行為を防止することも規定した。

さらに、かれは、毎年学部が実施している四期にわたる試験期を三期に減らしたのである。この措置によって、八学期試験に落第後六週間、またはせいぜい二カ月間だけ受験延期になっていた受験者が受験する一〇月期試験は、一八五〇年三月一五日の法律ゴッ第六三条の要件に抵触することになったのである。

そのため、バリユ文相は、一八五一年四月五日の訓令によって、第一期試験を七月一日、第二期試験を一〇月一五日に開始するというように定めたのである。その結果、学年あたりの授業期間を減少させてしまうことになったのである。そこで、フォルトゥル文相は、この点については法律を尊重すると同時に、受験者に対して、まともな受験準備のための時間を与えるために、一〇月期試験を廃止してしまったのである。

そのうえ、この三つの試験期以外の、個人または集団による、あらゆる補欠試験要求に応ずることを禁止した。かれの見解によると、「これらの補欠試験要求は、つねにまじめな、かつ正当な理由によるよりは、むしろ特定の便宜供与、または一般に承認しえない陳情の口実になっていた」(11, 95) からである。

最後に、フォルトゥル文相による一八五二年の通達の中で示された勤告の内容を検討してみよう。フォルトゥル文相の勤告は、試験官の合否判定が一度採択されたならば、外部からの、いかなる干渉も判定結果を変更できないという保証を試験官に与えようとした。つまり、かれは試験官の權威を高めようとしたのである。この点についての、かれの見解(II, 95~96) はつぎの通りである。

翻訳および論文問題の判定に関して、試験官の正当な嚴格性を要求するのは当然である。口述試験と筆記試験の採点における必要不可欠な条件は、(一)著作家の思想および言語についての正確な解釈であり、(二)文学または哲学の内容についての正確な論述である。試験官は無能者または怠け者に対しては、なんらの弁解も許さない。試験官は、受験者のあらゆる事柄に関して公平に考慮する必要がある場合には、試験科目ごとに、いくらかの追加点を求めることができる。

いかなる試験科目も、良好な結果を得られるように、不公平に取扱うようなことがあってはならない。ところで、試験の合否判定者に対して、ある程度の評価の自由裁量権が与えられなければならないとしても、それは試験官の自由裁量が、(一)受験者の学習に損失を与えないこと、(二)怠惰な受験者に便宜を与えないことという条件においてだけである。合否の判定が一度下されたならば、いかなる考慮も判定結果を変更できないのである。

#### 四 フォルトゥル文相の改革の結果

フォルトゥル文相の改革の結果、純然たる教育的見地からみた場合には、つぎのような利点がもたらされたのである。(一)筆記試験の強化。(二)口述試験科目の削減。(三)科学大学入学資格試験の試験科目として現代外国語の採択。

四文学大学入学資格学位を取得していなければ、いかなる人であっても受験を許可されなかった過重負担から受験者を解放し、文学大学入学資格学位取得者でなくとも受験できる科学大学入学資格試験の復活。

これらの措置は、中等学校教育制度の充実と、その教育成果の向上のために最良の措置であつたと同時に、大学入学資格試験の公正を保証する規定を、嚴重に実施させることになつたのである。

しかし、この改革の不利な点としては、つぎのようなことがあげられている。(一)一八四七年以後、大学入学資格試験委員である文学部教授および理学部教授の試験業務の負担を過重なものとした。その結果高等教育関係教師は、毎年にわたつて過重負担な試験業務を押しつけられるために、大学入学資格試験制度自体に対して、露骨な反感を示すようになったのである。(二)自由教育施設(私立学校)生徒の中等教育修了認定免状は、大学入学資格免状の一本だけとなつてしまつたのである。(三)国公立中等学校出身のすべての受験者の中等教育修了能力を、試験官が判定する場合の資料は、くじ運で出題される試験問題に対する解答の成績だけになつてしまつたのである。これこそはフォルトゥル文相による改革の最大の弱点であつた。

この点について、一八五四年における高等教育視学官會議報告書は、国公立学校教育団体からの要請に応ずるために取るべき適切な措置について、文部大臣に対して、つぎのような趣旨(II, 98)の勧告を行なつてゐる。

中等学校在学中の席次が首位である受験者が落第した事例はきわめて遺憾である。大多數の受験者は、大学入学資格試験問題の運不運にしばしば直面しすぎたため、ついに試験に僥倖を期待するようになってしまつた。これらの合否判定上の誤まりは、試験官の怠慢によると考えてはならない。中等学校優等生の不運を、試験制度自体の欠陥の証拠とみなしてはならない。受験者が中等学校在学中に取得した成績を、試験の合否判定の場合に、どの程度

まで算定すればよいのか？またこの強力な競争試験を、どのような保証で完全なものにしていかなければならないのか。

このような勧告を受けた文相は、公教育高等評議会に、この問題についての審議を委託した。公教育高等評議会からの文相に対する答申の要旨は、つぎの通りである。試験官は全受験者の品行と学業成績をほとんど考慮しないで、受験生をすべて同じ価値の一単位としてしか判定していない。それほどにまで、公平の保証が濫用されている。いまやこのような架空の想定を維持することはできない。大学の試験官は、世界中のすべての裁判官と同じように、被判定者について、それまでのすべての経歴を知る必要がある。受験者も中等教育学業履修書（内申書）を試験官に検閲してもらう必要がある。

この学業履修書（内申書）提出措置は、合否判定面での誤まりを是正した。また成績優秀な生徒は、学友の競争心を刺激する代償として、試験の免除または軽減の特典に浴することになったのである。

しかし、フォルトゥル文相の真のねらいは、中等学校教育修了認定である大学入学資格試験制度の改善によって、中等学校の教育水準を高めることにあったのである。しかし、中等学校の教育水準を向上させるためには、大学入学資格試験と中等学校教育課程との密接な連繫が必要不可欠な条件であるのに、かれはたんに試験の細部にわたって、くじ引き方法で規制したり、筆記試験と口述試験の方法を変更するだけで十分であると考えたのである。

一八五二年におけるフォルトゥル文相の中等学校教育課程改革の失敗の原因は、教育課程自体にあるよりも、むしろ外部的な事情に基づいていたというべきであろう。教育改革が成功するためには、学者が研究したり、權威ある文部大臣が命令したりするだけでは十分ではない。それとともに、改革の内容が教師団体によって十分に理解さ

れ、承認され、奉仕されなければならないのである。思うに一八五二年の改革は煩瑣な法規による拘束の圧力によって命令されただけであるために、教師団体からの全面的な支持が得られず、流産してしまつたというべきであらう。

フォルトゥル文相の改革は、本来は改革の推進者である教師側からの相互の信頼にもとづいた理解と協力を得る代りに、暗黙裡の、または公然たる抵抗を惹き起してしまつたのである。教師をまったく信用していないような行政命令に困惑した教師たちは、文相の命令の実行に対して、なんらの熱意も示さなかつたのである。

しかし、それが一八五二年改革の失敗の主要な理由であるとは考えられない。改革推進者の政治的または教育的な意図が何であらうとも、改革を不徹底なものにした理由は、中等学校教育課程内容と、それを認定する大学入学資格試験の試験科目内容の甚だしい隔差が、依然として是正されていなかったことにあるというべきであらう。つまり、改革の結果、中等学校教育課程の内容と大学入学資格試験科目の内容は、完全に同質的な有機的全体を形成する代りに、完全な不一致または絶縁状態になつてしまつたのである。

中等学校教育課程自体は、多くの進歩を示したのであるが、不幸にも大学入学資格試験よりもっと重大な誤まりに落ちこんだのである。同じ一人の教師に、いろいろな授業をもたせるなどによって、中等学校の教育水準をひき下げてしまつたのである。「科学は応用問題に、文学は試験準備の練習に戻つてしまつた」(96)のである。中等学校生徒は、大学入学資格試験受験準備のために、正規の国立中等学校上級部教育課程の履修を放棄したのである。かれらは知性の啓発には全く無用な記憶力だけに莫大な努力を要求する試験科目内容についての添削練習ばかりに専念して、毎日の貴重な学習時間をいけにえに供してしまつたのである。



試験科目の出題予定数は一四六まで減少した。しかし、実際にはクーザン文相制定の試験科目出題予定数五〇〇と、ほぼ同量の内容を包含していた。そのため、優秀な受験者は、教室での授業よりも受験用参考書か、または有能な受験準備屋を頼りにして受験勉強をした。さらに、普通程度または劣等の学力の生徒は、理科へ殺到し、その結果、大挙して科学大学入学資格試験を受験するようになったために、文理科履修分岐制度は所期の目的を達成することができなかつたのである。フォルトゥル文相は、「専科教育を設置すると同時に、専科中等教育教授資格試験を廃止した」(9, 64)。これは専門化の程度をひき上げることが犠牲にして、中途半端な専門化をすすめたことになってしまったのである。このようなフォルトゥル文相による改革の失敗に対して、国立中等学校教師ベルソの見解(11, 100~104)は下記の通りである。

もともと教育課程の特質は、実用の追求にある。教育課程は、人間が社会においてどのような専門領域を分担して活動しているかを考慮する。そして、それはそれぞれの専門領域の要請に応じようとするのである。それゆえ人間精神の一般陶冶よりもむしろ専門陶冶だけを目標にして海軍兵学校、林学専門大学校、陸軍士官学校、理工科専門大学校、高等師範学校は生徒を専門職業へ養成するのである。

これらの専門大学校入学試験はかなり若い年令の時から開放されている。また入学試験の水準は多数の受験者の割には、ごく少数の入学者しか許可しないほど激烈である。それゆえごく早い時期から入学試験受験準備教育に力を入れなければならないと考えられている。それゆえ専門大学校志望の中等学校生徒は、第四学級(第三学年)修了時に文学課程かまたは科学課程のいずれかを選択しなければならなかつた。この教育制度は産業界から転用した二分科という名称で呼ばれた。この文理科履修分岐制度が実施されて以来、中等学校はなんらの逸脱も超過もしな

くなつたのである。

文学教育では生徒はできるだけ多方面に眼を配り、いろいろな領域を駆け廻ることが望ましい。歴史と哲学においても生徒は文学と同じように学習するのが望ましい。

しかし文学科（文科）と科学科（理科）の分化は、人間能力と職業の分化に対応しているのである。文科と理科の二部門はそれぞれ並行して進級していくことになり、また専門大学校入学試験の難関にも接続するのである。

文理科履修分岐制度によつて、理科教育と文科教育が同格であると認定されたのである。この文理科履修分岐の原則が、初めて多数の学校において実施された結果、同じ年令の、同じ専攻部門の人間に対して、あらゆる困難に直面しながら科学を教授する代りに、いろいろな年令段階の、いろいろな専攻部門の人間に、いろいろな水準での科学を教授できるようになつたのである。

このような教育計画は計画自体としては申し分ない。しかし、この教育計画を実践に移した時、それは抜群の秀才である生徒を予想していたことが判明したのである。生徒は自己自身ならびに生活を認識する前に、文科か理科かいずれかの進路を選択する。

十三才頃に、生徒は文科か理科のいずれかに第一歩をふみ出す。かれは、文科では文法を認識する。科学では四則算術と物理学実験、化学実験を認識する。文科生徒は弁護士、司法官、牧師などに準備される。理科生徒は技師、医師、軍人などに準備される。

しかし、この十三才という年令段階では、生徒は自分自身では将来どんな職業に適しているかを、まだ的確には判断することができなかったのである。文科または理科のいずれの進路へ進むかについて、全く無関心な生徒は、

それらの部門の華やかな外観しか眼に入らなかったのである。

自己の将来の進路の選択に慎重な生徒は、これまでの経験に照らして進路の決定を下す。これまで論文や暗記科目が嫌いであった生徒は、文学部門へ進学する。もちろん、文科へいったん進学した生徒は、そこにおいてもまた退屈感におそわれる。かれらは以前の理科系統の教科に対する嫌悪感を忘れてしまう。かれらはふたたび一度はあきらめた元の古巣の理科課程へ、時計の振子の動きのごとくすぐごと戻ってくるのである。

文理科履修分岐制度は、生徒が文科または理科のいずれを選択するかについて、全く開放的な合理的な制度であった。しかし、文理科履修分岐制度に基づく教育課程運営の前提条件は、(一)生徒が自己の能力を正確に把握していること、(二)生徒が自己の将来を的確に見通すことができること、(三)生徒が数学に堪能であるということである。ところが、文理科履修分岐制度は、生徒に専攻科目に関係のない教科の学習を課したり、いくつかの共通科目を合同で履修させたりしたのである。生徒はあたかも二つの国の国民であるかのように、文科へ行ったり理科へ来たりするようになってしまったのである。

生徒は文理科分岐履修制度を誤解したのである。同じ学級内で、同じ教師のもとで、同じ科目を履修するようになる前でも、文科生はやはり文科生なのであり、理科生もやはり理科生であったのである。つまり、文科生と理科生に共通の人文科目の授業は、それぞれに異なるべきものであったのである。そうでなければ、生徒は時間を無駄に失うだけである。かれは、自分自身で代表しなければならぬ文学、または科学の権威を身に備えていないことになる。不幸にも、このような文科または理科の軽視によって、だれも利益を得ることはないのである。

このような文理科履修分岐制度は、生徒の知性陶冶にも、また大学入学資格試験受験準備教育にも、遺憾な結果

しか生じない。第三学級、またはそれ以前から、生徒は大学入学資格試験へ特別に準備される。生徒は他の事柄を学習する前に、大学入学資格試験の試験科目の内容を学習するのである。生徒は大学入学資格試験という案内人に導かれて、大学入学資格試験へ脇目もふらずに進んでいく。生徒は大学入学資格試験以外は何も見たり聞いたり行なおうとはしない。生徒の精神の窓の開放、正しい感覚の陶冶、想像力の純化、鑑賞眼を養うことなどは行なわれない。つまり、生徒各自がもっている個性を尊重し伸ばしていくことには、まったく無縁な教育に転落したのである。

中等教育の今後の進むべき道は明らかである。生徒は自己の進んで行く道を発見し、現に立っている所を知らなければならぬ。時間が経過するにつれて生徒の中に倦怠感が生じてくる。

かれは立ち止まるか、または跳び越えるかして、目的地からは離れた落し穴へ落ちてしまう。かれは落し穴の中で、救出機会を眼を閉じたままでじっと待ち続けるのである。多くの人は穴の中ほどへ落ちる。いく人かの人は共通教育によって他の縁（文科か理科）へ到着し、文科または理科の学業を途中で放棄した犠牲者は、そこから引き返し、脱落し、また少しやり直して、再び穴を跳び越えようとする。

神よ、かれらに救いを与えたまえ。かくのごとき生徒は、よき栄養分を十分に消化し、元気に満ちあふれ、適当な運動によって活気づけられる精神に代って、ただ酷使されただけの記憶力や、真の学問に代って、試験科目だけの皮相的な内容や、真の能力に代って試験問題番号だけという貧弱な財産しか身につけることができなかったのである。

現職文相に対する、このような痛烈な批判は、当代においては予期せざる弾圧を受ける危険があったために、用

心深い国立中等学校教授ベルソはフォルトゥル文相の死後に、ようやく公表したのである。フォルトゥル文相は、教師たちを押さえこむことだけに満足しないで、「教師たちの思想をもまた押さえこもうとしていた」(1, 36)からである。

しかし、このような批判があるにせよ、文理科履修分岐制度の今日的意義は、中等学校教育課程における文科系教科と、理科系教科の同格の地位の承認と並んで、中等教育における進路指導の可能性を示唆した点にあるといふべきである。

ところで、医師界だけはフォルトゥル文相の改革に正面から堂々と抗議した。一八五二年四月一〇日の布令は、医学部および薬学科専門大学校入学登録要件として、新しい科学大学入学資格免状の提出だけでよいと規定し、文学大学入学資格免状提出義務を免除してしまったのである。医学部教師は、このような免除措置は医師界の知的水準の低下を招くものであると、公教育行政当局に抗議した。医学部教師は、六カ月間にわたって、フォルトゥル文相に対して、この措置の撤回を陳情した。しかし、フォルトゥル文相は大学医学部教師の強硬な抗議に対して、教員任免に関する「絶対的な自由裁量権」(7, 242) を行使して苛酷な免職処分などによって弾圧したのである。

## 五 フォルトゥル文相改革の影響

### ルーラン文相の場合――

フォルトゥル文相の後任者ルーラン文相は一八五八年八月二三日に、皇帝に医師界の陳情を報告した。ルーラン宗務公教育大臣は、この報告書の中で、国家の富と、その活動の発展に対して、きわめて大きな役割を演ずる科学

教育を、工業、技芸および商業界へ普及することに努力したフォルトゥル前文相の功績に対して、敬意を表した。

しかし、ルーラン文相は前文相による改革が、改革自体は現実の要求に応ずるものであったけれども、改革の実施にあたつてはいくらかの行きすぎがあつたことを認めたのである。

かれによれば、医学準備教育が文学的要素の優位を否定し、たんに数学、物理学分野だけに限定するのであれば科学教育の導入は正当な限界を越えることになる。それゆえ、ルーラン文相の報告書の目的は、医学博士学位志望者に対する文学大学入学資格学位取得義務復活法案を正当化することにあつた。

ルーラン文相は、医師界陳情書を綿密に検討した。かれは医学教育にはギリシア語、ラテン語の教養が前提条件であるという主張を擁護した。かれによれば、医療技術が人類の貴重な遺産であるとすれば、それが効果的に教育され、かつ駆使されるためには、理論的、臨床的な知識と同じくらいに、知性と判断力を練磨しなければならないのである。医師志望者が医学博士の名にふさわしいようになり、また人体構造やその病理現象および医療事象を研究するようになるためには、自己の能力と勤勉を注意深い医療技術に集中しなければならない。しかし、医療自体は、もし正確な活発かつ鋭敏な精神が、全力をふるって医療技術をつねに確保し拡大しようとするのでなければ、無益となつてしまうのである。

人間の病氣と闘う医学は、人間全体、つまり身体的存在であると同時に道徳的な存在でもある人間を、身体と精神という二つの面で認識しなければならない。現代社会が硬直化した医学体系を非難し、また巨大な医療技術体系を作り上げて、それを社会における職業の頂点に据えているのは、実証主義教育に集中している医学を精神化しようとしているからである。そうであるならば、なぜ医学博士志望者に文学試験を免除するのであろうか。文学教

育こそは、鑑賞力（眼）、心情（胸）、精神（頭）に對して、最も繊細な傾向と最も氣の利いた衝動を育成するのである。

医学は無数の仕事に關係し、人体と知性を冒すあらゆる疾患について、社会のあらゆる階層の人から相談を受けるのである。医学は、人間の道德的行為についても判斷力を要求されるのであるから、十分な文学教育によって、科学（理科系學問）の履修に準備されなければならないのである。

もし医学がギリシア語・ラテン語古典科目を顧みないならば、どうなるであらうか。第一に、自己の不可欠の要素を失ってしまうことになる。第二に、医学が成功するための最良の方法から遠くへだたってしまうことになる。第三に、医療技術の進歩と医学の權威に對して、正真正銘の障害物を設けることになるのである。

ルーラン文相のギリシア・ラテン語古典科目尊重方針は、医師志望者を科学教養だけで強固に裝備しようとしたフォルトゥル文相の改革に對する明白な批判であつた。ルーラン文相は、一八五八年八月二三日の勅令によつて、医学博士志望者に對して、医学部第一次登録時の文学大学入学資格免狀提出義務を復活したのである。

しかし、ルーラン文相は伝統への復歸措置が、ただちに文学教育擁護論者と科学教育擁護論者の論争に終止符を打つたとは考えていなかった。大学入学資格免狀の価値は、中等学校教育の役割、水準、方法、方向などを規制するのであるから、たんに人文主義精神に合致しているということだけに甘んずることはできないのである。

ルーラン文相の教育行政の目的は、国立中等学校生徒が高等教育を効果的に履修できるようにふさわしい教育方法を、誠実と良識でもつて制定することにあつた。かれは文学大学入学資格取得者が医学部へ入学するためには、文学教養だけでなく、科学教養も十分に身につけていなければならないと考えていたのである。

そのため、かれは医学部第三学年登録にだけ必須条件となった科学大学入学資格免状を設置したのである。この医学部専用科学大学入学資格試験の試験科目は、科学大学入学資格試験の試験科目における数学の最も困難な部分を削除したために、医学履修の土台となる「科学と文学の正当かつ真実の同盟」が実現したのである。

つまり、ルーラン文相は科学大学入学資格試験受験者に対して、文学大学入学資格免状の取得を強制する制度へ復帰したのである。しかし、かれはたんに旧制度へ復帰しようとしたわけではなかった。かれは文学大学入学資格免状を取得した科学大学入学資格試験の全受験者に対して、文学試験を免除したのである。

一八五七年八月七日の規則第十六条によると、「文学大学入学資格免状所持受験者は、科学大学入学資格試験における文学試験を免除される。かれらが試問されない箇所は抽籤箱の中の四つの白球で示される」(11, 105) である。

ルーラン文相は権力作用で強制しようとも思わず、また強制不可能なものを、教師ならびに生徒や家庭の自由な自発性によって獲得しようとしたのである。ルーラン文相の、このような期待は、科学大学入学資格試験を二期に分けて受験したいという受験者の陳情を了承した措置と無関係ではない。

ルーラン文相は、陸軍大臣がサン・シール陸軍士官学校入学試験受験準備制度として要求したこの措置が、科学大学入学資格試験を文科生に対して、もっと近づきやすいようにできるかもしれないと考えたのである。

実際、フォルトゥル文相時代には科学大学入学資格試験はただ一種類だけであった。ルーラン文相は多くの種類の科学大学入学資格試験を制定した。一八五九年には、「完全科学大学入学資格試験、分割科学大学入学資格試験、限定科学大学入学資格試験、補充科学大学入学資格試験、文学大学入学資格者用科学大学入学資格試験という五種



類の科学大学入学資格試験が存在していた」(II, 606)のである。

大学入学資格試験受験者は、ますます流行する有利な「受験用とらの巻参考書」によって指導された。かれらは「受験用とらの巻参考書」によって試験内容に精通するようになり、いろいろな種類の試験が提供する機会にうまく適応するようになっていたのである。

ルーラン文相は、科学大学入学資格試験を物理学、博物学を対象とする第一次試験と、第二学級修了時に受験できる第二次試験に区分した。この措置は、中等学校上級学年へもち込まれた数学の大部分を修辞学級へ移行した。したがって、物理学、化学、博物学を文理科履修分岐の最初の二年間に配当することになった。

この結果、中等学校教師は教育学の基本原理に反して、ほんの少しの算術を知っているだけで、代数、幾何学、力学には全く無知な生徒に対して、重力、水力、物体の膨張などの法則を、とにもかくにも教えこまなければならぬということになってしまったのである。かくして、物理学、化学授業の学習能率低下はまもなく明らかとなった。

この四年後に、デュルイ文相は視学官報告に基づいて、「教師は学校において、以前のように自分の講義に注意深い熱心な生徒を見出すことはできないようになった。かれらは第三学級の中頃からは、大学入学資格免状だけを目標として勉強している。『大学入学資格試験受験用とらの巻参考書』ばかりを勉強して、正規教育の授業を全く放棄してしまっている」(II, 107)と、当代における中等教育界の実情について嘆いている。

一八五二年の規則は、文学大学入学資格試験の筆記試験をラテン語翻訳と、抽籤で出題文を決定するラテン語作文または国語作文の二科目と決定した。この試験方法は多くの抗議を引き起した。このような試験方法は、(一)試験

〔第4表〕 文学大学入学資格試験（1857年8月3日規則）

試験種別		試験科目	試験時間	配点指数	備考
筆記		ラテン語仏訳	2時間	1	成績は白，赤，黒色の各球合計10点満点で示す。 秀……白球8，黒球0 優……白球6，黒球0 良……黒球2以下 合格点は良以上。
		ラテン語講読	4時間	1	
口述	解釈	ギリシア語	1時間	1	
		ラテン語		1	
		国語		1	
	試問	論理学		1	
		歴史・地理		2	
		算術・幾何学・物理学		2	

〔第5表〕 科学大学入学資格試験（1857年8月7日規則）

試験種別		試 験 科 目	試 験 時 間	配点指数	備 考
筆 記		ラテン語仏訳	2 時 間	1	純粋・応用数学
		数 学	4 時 間	1	
	物 理 学				
口 述	解 釈	ラ テ ン 語	1時間15分	1	
		国 語			
	ドイツ語または 英 語				
	試 問	論 理 学		1	
		歴 史 ・ 地 理		1	
		数 学		2	
		物 理 学		2	
博 物 学		1			

に著しい差異を生ずること、(二)すべての受験者に対して平等な機会を提供していないことによって、非難されたのである。

それゆえ、ルーラン文相は第4表および第5表(11, 412-413)に示す通り、試験のまぐれあたりをなくするために、大学文学部教師の要望に応じて、大学入学資格試験受験者に対してラテン語講読を課したのである。ラテン語講読試験問題の出題水準は、修辞学級における通常練習問題程度とされた。当代における文学教育水準はかなり低下していた。そのような文学教育を再び名誉ある地位へ戻すためのただ一つの方法は、文学大学入学資格試験における文学科目の復活以外にはなかったのである。ルーラン文相は試験方法を変更しただけであり、そのほかの試験内容などは一八五二年の所定試験科目内容のままであった。

口述試験問題は、受験者が自分の知識を最大限に表現できるように、いろいろの問題を同じ番号で示すようになっていた。論理学の八問題は二十番までの番号で分類された。国史および地理も同じ出題方法である。各番号は古代史問題、中世史問題、近代史問題、地理問題を含んでいた。算術、幾何学、物理学も同じ方法で出題された。

ベルソは、大学入学資格試験の試験方法に関する改革の妥当性を認めていた。しかし、かれは中等学校の現実と自然的傾向に対する深い洞察から、改革に全面的賛成を示すことを保留した。かれによれば、「一八五七年の政令が改訂した科学大学入学資格試験の試験科目の内容は、試験官と受験者に多くの自由を与えた。しかし、同一の番号が多くの科学(理科系科目)を含んでいたので、受験者は第三番目の科学にヤマを賭けるために一番目または二番目の科学を犠牲にするおそれがあった」(11, 109)のである。

ルーラン文相は、試験における不正行為を除くために、試験方法の厳格な実施を大学区総長へ全面的に委嘱した。

かれは一八五七年八月一四日の通達の中で述べている。「大学区総長諸君、諸君は二つの大学入学資格試験に関する新しい規則の施行に重大責任を負うている。諸君はその広大な管轄区域において国家権力を代表している。それは張り子の虎のような特権ではない。諸君は、なんらかの不正行為を犯したという嫌疑のかけられている青少年を、十分な証拠に基づいて文部大臣に告発するのである。また、全国家庭のあらゆる利益を有効に保護し、家庭からの試験に関するあらゆる抗議の口実を除くために、自己の権限行使にあたつては、大学入学資格学位授与という学部的重要な業務を注意深く監督することが肝要である。

もし諸君がこの試験監督業務を十分に執行できないような場合には、本官は諸君に対して本官の訓令執行について貴下に毎日報告したり、不慮の事件に関する正当かつ学問的根拠のある意見を具申することができる大学区視学官を派遣するであろう。大学学部だけが文部省から独立した試験委員会を構成するのではない。学部が文学あるいは科学を教育し、また、学部が学位を授与するのは、国家の名によつて行なうのである。学部は、この教育権と学位授与権を、国家権力受託者（文部省）の高度の監督のもとに、また大学区総長の管理権に基づいてのみ行使することができるのである」（LL, 109）。

ルーラン文相は、一八六一年七月二〇日に文部大臣が適当と判断した場合には、文部大臣が学部試験委員会に対して、各担当科目ごとに試験委員会監督権をもった高等教育視学官を派遣できることを定めた布令を採択した。これは、中央権力（文部省）代表者に対する大学学部職員の服属の原則を貫徹しようとしたものにほかならない。

それまでは、文部大臣は、学部長または試験委員会委員長の報告書を添付した受験者答案を、大学区総長を経由して送付させるということによつてしか、大学入学資格試験の筆記試験を監督することができなかったのである。

それまでの慣行は、学部内規と同じように国家の中央権力（文部省）の監督権の拡大を抑制していたのである。

ルーラン文相は、帝国公教育評議会に提出した布令案趣旨説明書の中で、つぎのように述べている。「文学大学入学資格試験または科学大学入学資格試験の水準を維持するためには、筆記試験を文部大臣の監督のもとに置くだけで十分であろうか。

もしそうでないとすれば、高等教育視学官の報告は試験業務全体に拡大されなければならない。また、それは口述試験も含む方がよいのではなからうか。……一八六八年三月一七日の布令によれば、すべての視学官は学校の状態、学部、国公立中等学校における教育状況を知り、また生徒を試験したり、教師の公正と能力を確認するために、大学区を視察する。

ところで、視学官は法学部内規がきわめて賢明に予測して設置した法学部における試験には参加するのに、どうしてある大学区管内中等学校の生徒を試験することはできないのであろうか。国公立学校教育団体に關する布令は視学官に法学部学生に対する試験業務を担当させている。このことは、法学部教育に対してのみ明記されていることを、全部門の教育にも拡張解釈できることになるのではないだろうか。文部大臣の監督のもとで、視学官に対しても学部教師と同じ資格で、全学部における試験に参加する権限の付与が暗黙のうちに承認されていることになるのではないだろうか。

家庭の利益のためには、青少年教育を親の注意深い監督のもとで、どこまでも追求できるようにしておくことが大切である。同じように、国のためには、大学入学資格免状が全国どこにおいても共通の能力水準の証明であることが大切なのである。」(II, 110~111)

このような措置は教育的にはきわめて望ましいものであるといつてよい。確かに、大学入学資格試験の査察は、視学官に対して特定の学級の視察よりは、無限の豊富な情報の宝庫を提供するであろう。視学官はこの試験査察を試験の前後に行なわなければならない。視学官は教師と生徒の価値の評定責任者である。教育水準を均衡させる責任者である視学官が、大学入学資格試験に試験委員長として参加することは、文部大臣が監督権を委任できる最も効果的な監督方法なのである。

ルーラン文相の大学入学資格試験に関する諸措置の目的は、フォルトゥル前文相の改革を全面的に廃棄するといふのではなくて、ベルソなどの批判も取り入れて、大学入学資格試験の管理機構を円滑に運営できるようにすることにあつたといふべきである。

たとえば、パリおよび重要な州における国立中等学校の理科生は、文科生と合同で授業を受けるようなことはなくなつた。また、かれらは歴史授業と現代外国語授業以外には、お互いに共通授業の教科をもたなくなつたのである。このような措置は、文理科履修分岐に大きな打撃を与えたとは考えられない。それは、ごく一部分の修正であつたとしても、全面的な改革ではなかつたからである。

同様に、大学入学資格試験に関する決定も、たとえば科学大学入学資格試験の分割制度のように形式的には多くの重大な変更をもたらしたけれども、内容的には少しも変化しなかつたのである。要するに、中等学校教育課程および大学入学資格試験試験科目の内容は、歴代文相によつて踏襲されたのである。

ベルソは、このような事情を辛辣な機智によつて非難している。「わが国の科学大学入学資格取得者が、ある革命から生き残ることができるとすれば、それは広汎な教育課程に適應できたからである。したがって、その広汎な

教育課程を未来の世代にも受け継がせることは、わが国の弱虫どもを驚かせるために、中世における騎士の重い甲冑を保存しているのと同じように必要でありはしないか。」

ベルソの要望はみごとに尊重された。問題から問題へぎつと眼を通すだけでも数週間を必要とし、また小百科辞典でもある中等学校教育課程は、これまで通り保持されたのである。

当代における大学入学資格取得者の能力を評定するためには、いくつかの答案の見本を必要とする。しかし、かれらのいわゆる「甲冑」を入手することができないので、シモン文相が、当代の科学大学入学資格試験の試験科目の内容について述べていることだけで満足しなければならない。

「試験科目内容は、あらゆる科学の百科辞典であった。大学入学資格試験のすべての問題に解答できる生徒や教師はただの一人もフランスには存在しないと考えて、その広汎な内容に自己満足していたのである。このような状態は、第一に、試験成績の極端な不安定、第二に、無限なほど広範囲にわたる教科内容のほんの一部分をなまかりするだけで、学科内容をあまり精密に研究しないというような風潮をひき起したのである。」(10, 37~38)

しかし、ルーラン文相は自ら「あまりにも豊富すぎる教育課程内容」と呼んだものを精選するために、あえて弁を聞こうとはしなかった。しかし、かれは少なくともその必要性を認識し、世人にも訴えたのである。

「文学大学入学資格試験は、もっと知的かつ確実な試験となることが望ましいのではないだろうか。文学大学入学資格試験は、しばしば記憶力の体操にすぎなくなっている。中等学校教育界は、学問研究の正道から迷わせやすい早熟な受験準備教育のために、真正の教育から逸脱してしまっている。このような現状のもとでは、それは最も必要なものではなからうか。」(11, 113)

しかし、この問題の解決に実際に着手し、しばしば中途で挫折しながらも、粘り強く努力したのはデュルユイ文相であつた。(一九七六・一二・一〇稿)

### 参 考 文 献

- (1) Chevallier, P., L'enseignement français de la Révolution à nos jours, 1968.
- (2) Durkheim, E., L'évolution pédagogique en France II, 1938.
- (3) Fourrier, C., L'enseignement français de 1789 à 1945, 1965.
- (4) Gal, R., Histoire de l'éducation, 1953.
- (5) Gerbod, P., La condition universitaire en France au XIXe siècle, 1965.
- (6) Glagigny, M., Histoire de l'enseignement en France, 1949.
- (7) Liard, L., L'enseignement supérieure en France VII, 1888.
- (8) Léon, A., Histoire de l'enseignement en France, 1967.
- (9) ditto, Histoire de l'éducation technique, 1968.
- (10) Ponteil, F., Histoire de l'enseignement en France, 1966.
- (11) Piobetta, J. B., Le baccalauréat, 1937.
- (12) Prost, A., Histoire de l'enseignement en France 1800—1967, 1968.
- (13) Weill, G., Histoire de l'enseignement secondaire en France, 1921.
- (14) デュルケイム、フランス教育思想史下、普遍社、一九六六年  
小関藤一郎訳
- (15) A・レオン、フランス教育史、文庫クセジュ、白水社、一九六七年  
池端次郎訳
- (16) A・レオン、もののべながおき訳、フランスの技術教育の歴史、文庫クセジュ、白水社、一九六八年

【備考】文中の( )内の数字は文献番号、文献の引用頁数を示す。